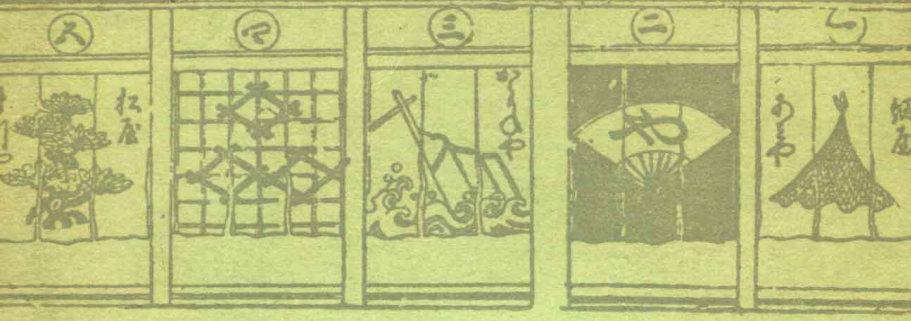
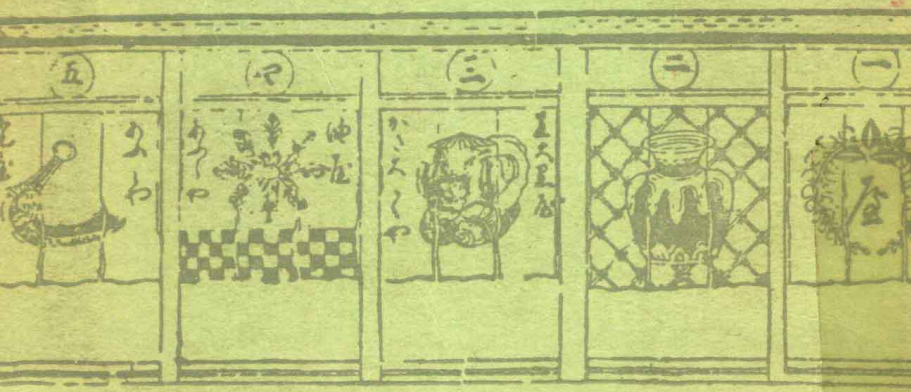


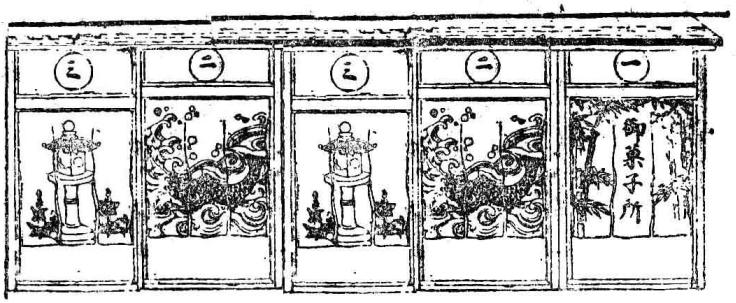
要註

日本永代蔵
世間胸算用

大藪虎亮編

武蔵野書院刊

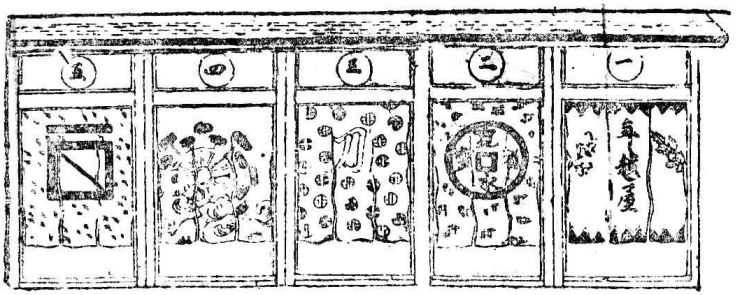




大藪虎亮編

永代藏・胸算用選

武藏野書院發行



本書の要領

一　本書は西鶴著「日本永代藏」および「世間胸算用」から代表的と思われる篇を教科用として選んだものである。

一　日本永代藏は貞享五戊辰年正月吉日と奥付にある大本により、世間胸算用は元祿五壬申年初陽吉日と奥付にある大本によつた。

一　日本永代藏は旁題に「大福新長者教」とあり、卷之一」題には本朝永代藏とあり、貞享五年（西紀一六八八年。この年九月三十日、元祿と改元。作者四十七歳）正月の刊行で、大本六卷六冊、毎卷五篇から成り、合計三十篇。内二十篇は致富、外十篇は富者沒落の筋である。

世間胸算用は旁題に「大晦日は一日千金」とあり、元祿五年（西紀一六九二年。作者五十一歳）正月の刊行で、大本五卷五冊、毎卷四篇から成り、合計二十篇。大晦日に金銀に浮沈する人心世相の描寫である。

一　頭註は、語はなるべく多く採り、解は紙面の都合で簡潔にした。再出の語にも重複を厭わず解を加えた。これは篇を選んで講讀する場合の便利をはかつたのである。

一　句讀點は文脈によつて打ち、かなづかいは歴史的のによつて改めたが、そのままの所もあり、

送假名は必要に應じて補つた。漢字も適宜變えたものがあり、例えば也をなりとし、筭を算とした如きである。

一　原本のさし繪は多く採り、また參考圖版も載せた。

一　終りに「金銀錢略說」を添え、なお錢屋、兩替屋、天秤の略說をも加えた。

（西鶴筆蹟と印）

目次

日本永代蔵

浪風靜に神通丸（巻一の三）……五
昔は掛算今は當産銀（巻一の四）……一一
世界の借屋大將（巻二の一）……一五
怪我の冬神鳴（巻二の二）……二〇
才覺を笠に着る大黒（巻二の三）……二四
煎じやう常とはかはる問薬（巻三の一）……三一
世はぬき取の觀音の眼（巻三の三）……三六
祈るしるしの神の折敷（巻四の一）……四一
茶の十徳も一度に皆（巻四の四）……四五
伊勢えびの高買（巻四の五）……五〇
廻り遠きは時計細工（巻五の一）……五六
世渡りには淀鯉のはたらき（巻五の二）……六〇
大豆一粒の光り堂（巻五の三）……六八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

朝の鹽籠夕の油桶（巻五の四）……七四
三匁五分曙のかね（巻五の五）……七八
見立て養子が利發（巻六の二）……八二
買置は世の心やすい時（巻六の三）……八八

世間胸算用

間屋の寛濶女（巻一の一）……九二
鼠の文づかい（巻一の四）……九六
門柱も枯かりの世（巻二の四）……一〇一
小判は寢姿の夢（巻三の三）……一〇六
才覺のぢくすだれ（巻五の二）……一一
平太郎殿（巻五の三）……一一六

附錄

金銀錢貨略說……一二三

○浪風靜かに神通丸

諸大名にはいかなる種を前生に蒔き給へる事にぞ有りける。萬事の白白を見し時は、目前の佛というて又外になし。さればとよ世に大名の御知行、百二十萬石を五百石どり、釋迦如來御入滅このかた今に永々勘定して見るに、これを取り盡さじといへり。大人小人の違ひ各別世界は廣し。近代泉州に唐かね屋とて金銀に有德なる人出來ぬ。世わたる大船をつくりて、其名を神通丸とて三千七百石積みても足かろく、北國の海を自在に乘りて、難波の入湊に八木の商賣をして次第に家榮えけるは、諸事につきて其身調義のよき故ぞかし。惣じて北濱の米市は日本第一の津なればこそ、一刻の間に五萬貫目のたてり商も有る事なり。その米は藏々に山を重ね、夕の嵐朝の雨、日和を見合せ、雲の立所を考へ、夜のうちの思ひ入にて賣る人有り買ふ人有り、一分二分を爭ひ、人の山をなし、互に面を見知りたる人には、千石萬石の米をも賣買せしに、兩人手打ちて後は少

○有りける　正しくは有りけん。

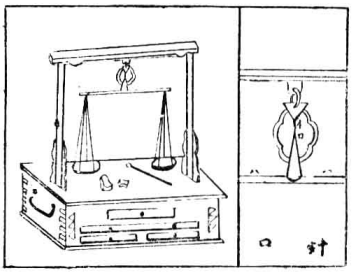
○唐かね屋　名は與茂三。寛文頃の人。

○調義　工夫才覺

○たてり商　一種の空米相場。

○預り手形　借用證書
○出入　粉爭。訴訟。
○大腹中　太つ腹
○杉ばへ　三角状に米俵を積むこと。
○上荷茶船　上荷船茶船。
○ひゞき　巻尾略說參照。

しも是に相違なかりき。世上に金銀の取遣には預り手形に請判、慥に何時なりとも御用次第と相定めし事さへ、その約束をのばし、出入になる事なりしに、空定めなき雲を印の契約をたがへず、その日切に損徳をかまはず賣買せしは、扶桑第一の大商人の心も大腹中にして、それ程の世をわたるなる、難波橋より西見渡しの百景、數千軒の問丸、蔑をならべ、白土雪の曙をうばふ。杉ばへの俵物山もさながら動きて、人馬に付おくれば大道轟き地雷のごとし。上荷茶船かぎりもなく川浪に浮びしは、秋の柳にことならず。米さしの先を爭ひ、若い者の勢ひ虎臥す竹の林と見え、大帳雲を翻へし十露盤丸雪をはしらせ、天秤二六時中の鐘にひゞきまさつて、其家の風暖簾吹きかへしぬ。商人あまた有るが中の島に岡・肥前屋・木屋・深江屋・肥後屋・鹽屋・大塚屋・桑名屋・鴻池屋・紙屋・備前屋・宇和島屋・塚口屋・淀屋など、

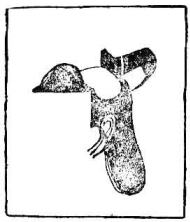


○過しぬ　養つている。使用している。
○わづかなる　資本少ない。
○置頭巾　平たい頭巾。大黒頭巾。
○物つくり　農業

○供はやし　主人の供。
○地算　加え算

○内證あつかひ　内密の仲裁。
○手前くらしむき。

此所久しき分限にして商賣やめて多く人を過しぬ。昔こゝかしこのわたりにて纔なる人なども、その時にあうて旦那様とよばれて、置頭巾撞木杖替草履取るも、是れ皆大和河内津の國和泉近在の物つくりせし人の子供、惣領殘して末々をでつち奉公に遣はし置き、鼻垂れて手足の土氣おちざるうちは、豆腐花柚の小買物につかはれしが、お仕着二つ三つ年を重ねけるに、定紋をあらため、髪の結振を吟味仕出し、風俗も人のやうになるにしたがひ、供はやし、能、舟遊びにもめしつれられ、行く水に



（角前髪）

數かく砂手習地算も子守の片手に置き習ひ、いつとなく角前髪より銀取の袋をかたげ、次第おくりの手代分になつて、見るを見眞似に自分商を仕掛け、利德はだまりて損は親方にかづけ、肝心の身を持つ時、親請人に難義をかけ、遣ひ捨てし金銀の出所なく、それなりけりに内證曖ひ濟みて、荷ひ商の身の行末幾人か限りなし、おのれが性根によつて長者にもなる事ぞかし。惣じて大坂の手前よろしき人、代

○吉藏三助の總稱。　下男

○新屋天王寺屋大兩替屋。

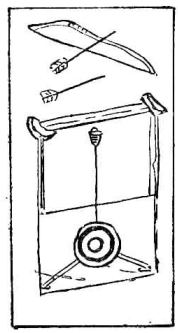
○一分店　獨立の店

○仕置　造りかた

○すぎはひは云々諺。業種の多いこと。

○筒落米　米さしの時こぼれた米。

代つゞきしにはあらず、大かたは吉藏三助がなりあがり銀持になり、その時を得て詩歌鞠楊弓琴笛鼓香會茶の湯も、おのづからに覺えてよき人付合、むかしの片言もうさりぬ。兎角に人はならはせ、公家のおとし子作り花して賣るまじき物にもあらず。是を思ふに奉公は主取が第一の仕合なり。子細は繁昌の所にはよらず、北濱過書町のほとりに住みけるさし物細工人ありしに、此職人にもちひさき弟子二人ありしが、新屋天王寺屋などの十貫目入の銀箱、不斷手にかけて寸法は覺えて、その銀はつひに手に取りたる事なし。此弟子おとなしくなりて一分店を出しけるに、親方にかはらず鍋蓋火燧箱の仕置、これより外をしらず。此者も同じ所から大所に使はれなば、それ〴〵の商人になるべき物と見及びふびんなり。すぎはひは草ばうきの種なるべし。此濱に西國米水揚の折ふし、こぼれすたれる筒落米をはき集めて、其日を暮せる老女有りけるが、形ふつゝかなれば、

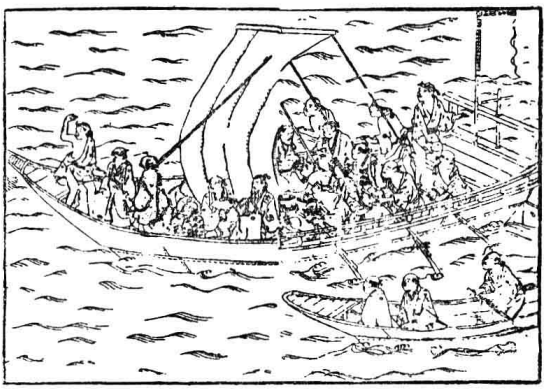


（揚　弓）

○改免　田租の率を高めたこと。諸國落米が增加して大阪に集まる。

○小口俵　俵の兩端をふさぐわらぶた。

廿三より後家となりしに、後夫となるべき人もなく、ひとり有る世悴を行すゑの樂みに、かなしき年をふりしに、いつの頃か諸國改免の世の中すぐれて八木大分この浦に入舟書夜に揚げかね、借蔵せまりて置くべきかたもなく、澤山に取りなほし、捨れる米を塵塚まじりにはき集めけるに、朝夕に食ひあまして壹斗四五升たまりけるに、是れより慾心出來て始末をしけるに、はや年中に七石五斗のばしてひそかに賣り、明のとしなほまたのばしける程に、毎年かさみて二十餘年に胞くり金十二貫五百目になしぬ。其後世悴にも九歳の時よりあそばせずして、小口俵のすたるをひろひ集めて、錢ざしをなはせて、兩替屋問屋に賣らせけるに、人

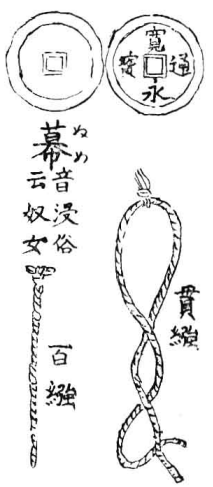


（船　海）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

○錢見せ　卷尾略說參照。

○掛屋　卷尾略說參照。



の思ひよらざる錢まうけして、我が手よりかせぎ出し、後には慥なるかたへ日借の小判、當座がしのはした銀、是れより思ひ付きて今橋の片陰に錢見せ出しけるに、田舍人立寄るにひまなく、明がたより暮がたまで、わづかの銀子とりひろげて、丁銀こまがねかへ、小判を大豆板に替へ、秤にひまなくかけ出し、毎日〳〵つもりて十年たゝぬうちに、仲間商のうはもりになつて、諸方に借帳、我がかたへはかる事なく、銀替の手代これに腰をかゞめ機嫌をとる程になりぬ。小判市も此男買ひ出せば俄にあがり、賣出せば忽ちさがり口になれり。自ら此男の口を窺ひ、みな〳〵手をさげて旦那〳〵と申しぬ。中にも先祖をさがして、なんぞあれめに隨ひ世を渡るも口惜しきと我を立てける人、物の急なる時にさしあたつて迷惑し、是れも亦御無心申さるゝ、只金銀の威勢ぞかし。後は大名衆の掛屋、あなたこなたの御出入もつぱらにしければ、昔の事は

○乾の隅　昔福の神を祭つた。

○掛算　掛売。当座銀は現金売買。

○浮世小紋　當世小紋。

○御所の　御所風の。

○解捨云々　鹿子の日結びを解いてぼかしたもの。

○内證　財産。

○いたりせんさく　此上ないぜいたく。

○いんじ　遊女。

いひ出す人もなく、歴々の聟となつて、家蔵數をつくりて、母親の持たれし筒落箒、藥箒子、澁團扇は貧乏まねくといへ共、此家の寶物とて乾の隅にをさめ置かれし。諸國をめぐりけるに、今もまだかせいて見るべき所は大坂北濱、流れありく銀もありといへり。（卷一の三）

○昔は掛算今は當座銀

古代にかはつて人の風俗次第奢になつて、諸事その分際よりは花麗を好み、殊に妻子の衣服、また上もなき事ども身のほど知らず、冥加恐しき。高家貴人の御衣さへ、京織羽二重の外はなかりき。殊さら黑き物に定まつての五所紋、大名より末々の萬人に、この似合はざるといふ事なし。近年小ざかしき都人の仕出し、男女の衣類品々の美をつくし、雛形に色をうつし、浮世小紋の模様、御所の百色染、解捨の洗鹿子、物好各別世界にいたりせんさく、女の身持娘の縁組より内證うすくなりて、家業の障となる人數知らず。姪姒の平生きよらを見するは渡世の爲なり、万民

○衣掛山　洛北衣笠山。

○紋羅　紋様ある絽。

○唐織　輸入織物の一部。之に似せた和製もいう。

○衣装法度　衣服に關する禁制。

○呉服所　上流の注文を引受ける呉服店。

の美婦は春の花見、秋の紅葉見、婚禮振舞の外は目立つ衣裳を着重ねず共すむ事なり。或る時室町のかた脇に仕立物屋の軒かをりて、橘の暖簾掛りて、當世着物の縫出しすぐれて都の手利ありて、絹綿爰に持ちつどひて、さながら衣掛山を我が宿に見し事ぞかし。仕付の絲火熨あつるを待ち兼ねしほとゝぎす、初空卯月一日は衣がへとて色よき袷を縫ひかけしを見るに、白き紋羅のひつかへしに、緋縮綿を中に入れて三枚がさねの袷、兩袖襟に引綿、昔はなかりし事なり。此の上は萬の唐織を常住着となすべし。此時節の衣裳法度、諸國諸人の身の爲、今思ひあたりて有難くおぼえぬ。商人のよき衣着たるも見苦し、紬はおのれに備はりて見よげなり、武士は綺羅を本として勤むる身なれば、たとへ無僕のさぶらひまでも、風義常にしておもはしからず。近代江戸靜にして松はかはらず常盤橋、本町呉服所京の出店紋付鑑にあらはし、棚もり手代それ〳〵に得意の御屋敷へ出入り、ともかせぎに勵みあひ、商賣に油斷なく、辯舌手だれ智惠才覺、算用たけて惡銀をつかまず、利德に生牛の目をぬく

○虎の御門　江戸城の門の一。今は地名で港區内。

○衣配　年末に衣部下に等を一門、贈ること。

○小納戸　幕府武家で衣服其他の雜務を取る役。

○京銀　京の兩替屋への預金利子にも當らず。

じり、虎の御門の夜をこめ、千里に行くも奉公、朝には星をかづき秤竿に心玉をなして、明暮御機嫌とれども、以前とちがひ今はん昌の武蔵野なれども、隅から角まで手入して、更に摑取もなかりき。御祝言又は衣配の折からは、其役人小納戸がたの好みにて、一商して取りけるに、今時は諸方の入札すこしの利潤を見かけて喰ひ詰になりて、内證かなしく外聞ばかりの御用等調へ、剰へ大分の賣がゝり數年不埒になりて、京銀の利まはしにもあはず、かはし銀につまりて難義、俄に取りひろげたる棚も仕舞ひがたく、自小前になりぬ。兎角はあはぬ算用、

（越後屋）

江戸棚殘つて何百貫目の損、足もとのあかいうちに本紅の色かへてと、銘々分別する時、又商の道は有る物、三井九郎右衛門といふ男、手金の

○むかし小判　駿河鑄造の小判。

○鑓印長　鑓印になるだけの長さ。

○袖ふくりん　袖にあてる切れ。

○手前細工人　店かかえの細工人

光むかし小判の駿河町と云ふ所に、面九間に四十間に棟高く長屋作りして、新棚を出し、萬現銀賣にかけぬなしと相定め、四十餘人利發手代を追ひまはし、一人一色の役目、たとへば金襴類一人、日野郡内絹類一人、羽二重一人、紗綾類一人、紅類一人、麻袴類一人、毛織類一人、此の如く手分をして、天鵞兎一寸四方、段子毛貫袋になる程、緋縮子鑓印長、龍門の袖覆輪かた〳〵にても、物の自由に賣渡しぬ。殊更俄か目見の熨斗目、いそぎの羽織などは、其使を待たせ數十人の手前細工人立ちならび、即座に仕立てこれを渡しぬ。さによつて家榮へ、毎日金子百五十兩づつならしに商賣しけるとなり。世の重寶是

(紋鶴　舞奈　比朝)

れぞかし。此亭主を見るに、目鼻手足あつて外の人にかはつた所もなく、家職にかはつて賢し。大商人の手本なるべし。いろは付の引出に、唐國和朝の絹布をたゝみこみ、品々の時代絹、中將姫の手織の蚊屋、人丸の明石縮、阿彌陀の涎かけ、朝比奈が舞鶴の切、達磨大師の敷蒲團、林和靖が括頭巾、三條小鍛冶が刀袋、何によらずないといふ物なし、萬有帳めでたし。（卷一の四）

○有帳　在庫品記入帳。

○世界　世間。

○借屋　かしや（日錄）。借屋請狀之事　保證人が町役人に出す保證書の見出し。

○家質　抵當の家屋。

○藤市　藤屋市兵衛。長崎商人。御池町住。

○内藏　重要品を入れる。

○世界の借屋大將

借屋請狀之事、室町菱屋長左衛門殿借屋に居申され候藤市と申す人、慥に千貫目御座候。廣き世界にならびなき分限我なりと自慢申せし。子細は二間口の棚借にて千貫目持、都のさたになりしに、烏丸通に三十八貫目の家質を取りしが、利銀つもりておのづから流れ、始めて家持となり是を悔みぬ。今迄は借屋に居ての分限といはれしに、向後家有るからは京の歴々の内藏の塵埃ぞかし。此藤市利發にして、一代のうちにかく手

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.